

Yoichi Sumi:  
*Le Neveu de Rameau,  
 Caprices et logiques du  
 jeu*

高橋安光

ヴァンドゥル家所蔵の多数のディドロ手稿本を発見したディークマンをはじめフェーヴル、ブルースト、ヴァローによって監集され、世界中の研究者 45 名の協力を得た画期的なディドロ全集 33 巻がようやくエルマン書店より刊行の運びとなったが、鳥井博郎、小場瀬卓三氏らによって先鞭をつけられた日本におけるディドロ研究は今や京大の中川久定氏らの業績によって国際的評価を獲得しつつあり、上掲の鷲見洋一氏による『ラモアの甥、ゲームの気まぐれと論理』もそうした評価をいっそう高めるものであろう。その論著の主要な一部はすでにブルースト監集『啓蒙期の若干の作家についての新研究』（1972 年、ジュネーヴ、ドロス書店刊）に「ラモアの甥の作者におけるチェスのイメージをめぐって」と題して寄稿されている。

鷲見氏が留学中に指導を受けたモンペリエのポール・ヴァレリー大学教授ジャック・ブルーストは一昨年訪日して精力的にディドロ研究セミナーの指導を行なったが、同教授が本書に寄せた序文によれば、モンペリエにおける 18 世紀研究者グループの定期的討論会ではブルースト教授自身足下の大地が落ち込むような思いを何度か経験したと述懐しているほどであるから、それに参加していた鷲見氏がいかに多くのものを学びえたかは吾人の想像を超えるところであろう。したがってさしずめブルースト教授による本書の評価をう

かがうことにしよう。

「ラモアの甥にたいする彼の理解は純粋に思弁的ではなく、メシヨニックが述べたように、生きることに密着したレクチュール・エクリチュールである。」

ここにいうレクチュール・エクリチュールという表現の本当の意味を私は分かってはいないのだが、いまさら調べたり尋ねたりする気持になれないのは研究者の端くれとしてわびしいかぎりである。

ところでブルースト教授は見えすいたお世辞などは一言も述べず、淡々として筆を進め、つぎのような指摘も行なっているのだ、鷲見氏は外国人として研究会に参加したための利点をもっていた、つまりフランス人であれば見過ごしそうな問題点に着眼しえたのではないかと。しかしこのことは鷲見氏にかぎらず外国文学研究者一般にあてまるはずであり、その利点を生かしうるかどうかはその人の資質と努力次第である。

彼と私の二人物の会話という形式をもつディドロの問題小説『ラモアの甥』はながいあいだ二元論的な解釈を与えられてきた。この二元論とはまったく対立に他ならない分裂を意味するものである。もっともこうした不毛の二元論的解釈の克服が試みられなかったわけではなく、矛盾の止揚という弁証法的アプローチがそれである。だがその方法は作品の内面的理解に役立つよりは単純なイデオロギー的理解に墮する危険を伴っていたのだ。こうした従来の解釈に飽き足らぬ鷲見氏はそこに一元論的解釈をさぐり、文法構造的分析を行ない、ゲーム小説という仮説を立てたのである。それはあらゆる変化に適應しうる統一原理を内包するゲーム体系であり、具体的に言えば、ディドロがカフェなどで好んだといわれる西洋将棋のイメージに準拠したものである。さらに氏はディドロがつよく関心をよせていた生物学上の個体という概念をゲーム

の論理に導入し、作品のいっそう有機的な解釈を可能ならしめたのである。

以上に鷺見氏の主要な方法論の一端を紹介したが、私にとってとくに興味深かったのはその方法を支える氏の根本的姿勢である。それは学者の良心といった月並みな表現では言いつくすことができない一つの情念である。

「終りにあたり、私の説明がいままでいささか回避してきた一つの問題点を強調しなければならない。それは最後の章を編むあいだに私の評言の中に生まれた一種の擬態のことである。それが私の全存在をディドロのテキストの中から汲みとることを可能にしたように思えるのである。かの哲学者の操り人形は同時に私のそれでもある。また批評家のあいだではあまりにも有名な脱線といった欲求に対応しうるのは脱線そのものでしかなかった。私の著作に結論が欠如していることもそれで説明がつくのである。」

こうした告白は意地の悪い批評家の手にかかれれば格好な慰み物にされかねないが、私は研究者としての貴重な資質を見出したいのである。なぜならば学問の世界にあっても自分にふさわしい(あるいはふさわしいと信じた)相手を選び、それに惚れこむことが不可欠の条件であるからだ。客観的にながめられるのも惚れぬいた後のことであり、初めから距離を置いてながめられるのは裏面白くもない実証主義者だけである。そんな人びとには惚れる相手は誰であってもかまわないのだ。そうした意味で鷺見氏の立場はきわめて文学的であり、それだけに惚れぬいた後に氏が見出すであろうディドロ像が見ものである。

さて紋切り型の締めくくりになるが、氏のフランス語の表現について言及することが許されるならば、もちろん私の語学力では氏が言わんとするところを十分に読みとることはできないが、本書の随所に見出されるエスプリというかユーモアというか洒落た言回しは

生硬になりがちな学術論文にどれほどの気易さを加えていることであろうか。

Yoichi Sumi: *Le Neveu de Rameau, caprices et logiques du jeu*. Librairie-Edition France Tosho, Tokyo, 1975.